

オオコノハズクの山口県鹿野町での巣箱繁殖例

小林繁樹¹・深町修²・藤井君子³

1. 〒745-0802 山口県徳山市栗屋坂田 948-24

2. 〒746-0034 山口県新南陽市富田 2705-10

3. 〒746-0024 山口県新南陽市古泉 2-20-36

はじめに

オオコノハズク *Otus bakkamoena* は、ウスリー地方、中国東北地区、サハリン、日本、台湾、中国、インド、インドシナ半島、フィリピン、スンダ列島などで繁殖し、多くは留鳥であるが、一部は冬に移動する。日本では留鳥として全国的に生息するが、北地のものは冬、暖地に移動する。繁殖記録のある地域は北海道、本州、四国、九州、佐渡、対馬、伊豆諸島である（高野 1981）。

自然の樹洞に巣をつくったり、木や崖のくぼみに営巣する鳥は、人工的な巣穴あるいは巢台に巣をつくる傾向があり、日本ではこれまでに、26種の鳥が人工営巣場所を利用していることが知られている。そのうち樹洞のかわりとなる巣箱を利用し繁殖したフクロウ目の種はシマフクロウ *Ketupa blakistoni*、コノハズク *O. scops*、アオバズク *Ninox scutulata*、フクロウ *Strix uralensis* の4種で、オオコノハズクについては、まだ巣箱を利用した繁殖記録は報告されていない（小池・樋口 1989）。

今回筆者らは、山口県都濃郡鹿野町の山林でオオコノハズクの巣箱営巣を2例観察したので状況を報告する。

巣箱設置場所の環境および設置状況等

今回オオコノハズクが巣箱で繁殖した山口県都濃郡鹿野町仁保谷は本州の最西端、山口県のほぼ中央部の山地で34°17'N, 131°50'Eに位置し、海拔は550 mで錦川の支流仁保川の上流にあるスギの人工林内である。スギは30～40年生で、林内は樹冠は閉じているものの、枝打ちが行なわれ、手入れが行き届いており、1991年9月の台風19号によって、その一部が倒木したこと、林床の植生がまばらであることから見通しがよく、比較的明るい状態であった。仁保川をはさんだ対岸の山林はシイ、クヌギなどの広葉樹を主とした自然林である。

巣箱はアオバズクを営巣させる目的で深町が1989年にスギ林内に1個設置し、その後1995年から1997年にかけて毎年1個づつ追加し、合計4個架設したが、利用がなくそのままにしておいたもので、1998年にはじめてそのうち2個をオオコノハズクが、1個をシジュウカラ *Parus major* が繁殖に利用した。

巣箱は片屋根式で、厚さ約1cmの板を使用し、寸法は高さが前面は37cm、後面が43cm、

1998年11月30日 受理

キーワード：オオコノハズク、巣箱、繁殖記録、山口県

横が35cm、奥行き35cm、底辺が33cm四方、屋根は長さ50cm四方で取り外しができ、茶褐色の金属製トタンを貼った。前面中央やや上部に設けた入り口の形状は円形で直径11cmである。ぐらつかない様に、架設するスギの木の形状に合わせて当て板をとりつけ巣箱を固定した(図1)。

巣箱は高さ約4~9mでいずれも枝打ちした幹にとりつけ、オオコノハズクの利用が確認された後、捕食性動物の侵入を防ぐため地上1.3~1.5mの位置に、90cm四方のプラスチック製波トタンを、木の直径にあわせて切ってとりつけ、波トタンと樹木との隙間は直径4cmの合成樹脂製蛇腹ホース(洗濯機の排水ホース)をトタンの上下に巻いて塞いだ。オオコノハズクの利用があった2つの巣箱の設置は、巣箱Aを仁保川の溪流沿いにある林道脇の樹高約20m、胸高直径30cmのスギの木の地上から8.3mの高さで林道向きにとりつけた。巣箱Bは林道より40mくらい登ったスギ林の中の樹高約20m、胸高直径22cmのスギの木の地上から3.8mの高さに谷側を向けてとりつけた(図2)。巣箱AとBは直線距離で約40mである。

観察状況

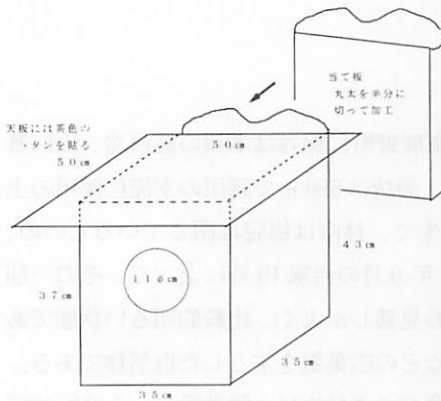


図1. オオコノハズクが営巣した巣箱の構造
Fig. 1. Structure of the nest box used by Collared Scops Owl.

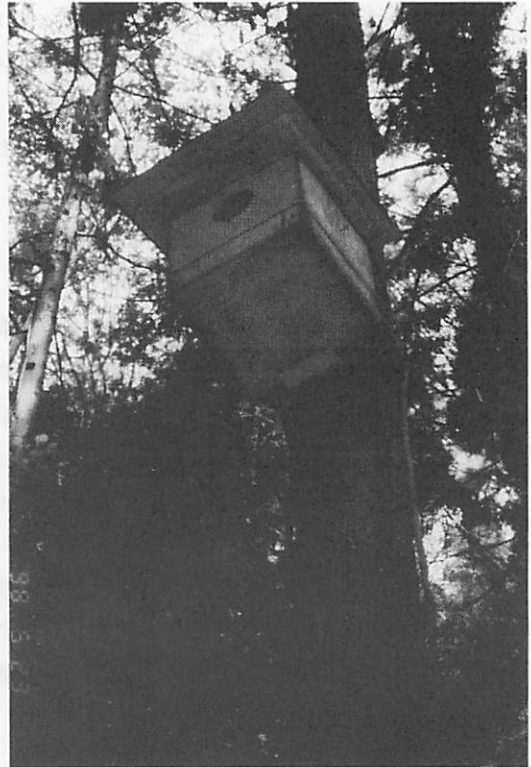


図2. オオコノハズクが営巣した巣箱の外観
Fig. 2. Picture of the nest box used by Collared Scops Owl.

以下に繁殖を確認した2つの巣箱の状況を別々に記す。

・巣箱Aの利用状況

1989年11月19日にはじめて巣箱を設置したが、その後、利用状況の確認は行なっていなかった。1995年11月12日に、巣箱が壊れかけ、中から巣材がみえたので登ってみると、中からムササビが飛び出してきた。巣箱内部はスギの樹皮を剥ぎ取って厚く敷き詰めており、巣材の古さから、かなり以前からムササビがねぐらとして利用していたものと思われた。1995年11月19日に巣箱を修理のため、外を二重にするような形で補強して、以前より少し下げ、地上8.3mの位置に架け替えた。この時ムササビの巣材はほぼそのまま巣箱に残した。1996年3月31日に巣箱点検のため内部をのぞいたところオオコノハズクがおり、4月7日、14日と合計3回巣箱内でじっと座っている姿を確認した。繁殖については5月3日に巣箱内にある種不明の卵殻を確認しただけで確証を得られずにいた。その後1997年12月21日と1998年1月4日に巣穴からムササビが顔を出しているのを確認したので、1998年4月25日ヘビ類やテンなどが入らない様にヘビ返しを取りつけた。

1998年5月3日巣箱を確認したところ、オオコノハズクの親鳥と白い羽毛につつまれたヒヨコ大のヒナ3羽がいて、近くにヒメネズミと思われる死骸2匹があった。この時、親鳥は逃げ出すこともなくそのままヒナを抱き続けていた。5月10日にはヒナ5羽と、ヒメネズミと思われる死骸が1匹あった。ヒナは茶褐色の羽毛に覆われており、わずかに白い綿毛も残っていて、大きさにやや違いがみられた。虹彩はやや赤みを帯びた黄色で、足は体長の割には大きかった。ヒナ5羽のうち2羽に環境庁の標識用足環（番号090-44416と090-44417）をとりつけた。5月23日には巣内はヒナ2羽のみで、残りの3羽は巣立ちした様であった。巣内に残った2羽はいずれも標識足環のついた個体で白い綿毛がなくなっており茶褐色になっていたが、尾羽は鞘に包まれ伸びきっていなかった。この時、足環番号090-44416の個体について計測を実施したところ、嘴峰長（Length of bill without cere）20mm、全長160mm、ふしよ長38.3mm、自然翼長121mm、尾長40mm、翼開長460mmであった。5月24日にはヒナは1羽しか残っておらず、6月16日にはすでに巣立ち後で巣内には何もいなかった。9月26日観察時には、ムササビが住みつき巣穴からのぞいており、オオコノハズクの利用は認められなかった。

・巣箱Bの利用状況

1996年4月7日に架設後、しばらくは利用状況の確認は行なわなかった。1997年6月14日に確認した際は内部は空であったが、1997年10月24日にはスギ皮の茶色の部分を幅5～10mmに裂いて材料にしたムササビのものと思われる巣があった。その後も1997年12月21日、1998年2月14日、1998年3月14日と巣箱内は変化がなくムササビも利用していない様であった。

1998年5月3日、巣箱Aでオオコノハズクの抱雛を確認したので、巣箱Bをのぞいてみると、スギの皮が厚く敷き詰められた巣箱内でオオコノハズクがじっと座っていた。そこですぐに



図3. 巣箱内のオオコノハズクの親鳥と4羽のヒナ(1998年5月28日)
Fig. 3. An adult and four nestlings in the nest box (May 28, 1998).

へび返しを取りつけた。1998年5月4日には朝から夕方までのあいだに4回巣内をのぞいてみたが、オオコノハズクはその都度座っている向きが違っており、抱卵中と思われた。1998年5月6日、10日と成鳥は目を閉じたままうずくまっていた。5月16日も相変わらず成鳥は座っていて、のぞくと顔をこちらに向けて嘴をカチカチ鳴らし、威嚇音を出した。5月23日にはじめてヒナ4羽を確認した。巣の右隅で目は閉じたまま座っている親鳥の翼の下に白い羽毛に包まれたヒヨコの半分位の大きさのヒナ1羽と、親鳥の左側にいずれも白い羽毛に覆われた多少大きさに差があるヒナ3羽がかたまっていた。巣箱内にはヒメネズミと思われる頭胴長3～5cmの死骸3匹があった。5月28日には赤褐色の虹彩をした親鳥が、巣箱の右隅で翼を広げて白い綿羽におおわれたヒナ4羽を抱いていた。ヒナはすでに目が開いており、大きさに差があった。巣箱の右端に4匹、左隅に3匹のヒメネズミと思われる死骸が置かれていた(図3)。5月31日午前は親子でいたが午後はヒナのみ5羽であった。6月7日には朝は親子、午後はヒナ5羽だけでいた。6月16日巣箱をのぞいていると、親鳥が後ろから襲ってきて、帽子をかぶった後頭部を爪で一撃された。その後親鳥は20～30m離れたスギの木に止まっていたが、しばらくしていなくなった。巣箱の底に穴を開け忘れていたために、液状の糞がたまって悪臭がしていたのでムササビの巣材を少し入れてやった。6月20日には巣立ち間近まで成長した茶褐色のヒナ1羽だけが残っていた。環境庁の標識足環080-05862を取りつけた時、ふしよ長を測定した結果32.6mmであった。6月28日には巣内は空であった。

考 察

今回のオオコノハズクの巣箱利用による繁殖は、本来の営巣場所である樹洞(清棲1978)がある様な老齢の大木が、近年減少してきたために、代替の営巣場所である巣箱を利用したものと思われる。架設当初は巣箱内に何も入れていなかったが、ムササビがスギ皮を搬入し、ねぐらとして利用したことが巣箱利用の繁殖につながった可能性がある。また当地ではテン

やマムシなどの繁殖を阻害する可能性のある動物が観察されているため、ヘビ返しを、オオコノハズクの巣箱利用確認後とりつけたが、このことも今回の繁殖が巢立ちにまで至った理由の一つと考えられる。巣箱の寸法については当初アオハズクの営巣用を考慮していたため、大きすぎる様に思われたが本種が営巣場所を選択する上で広い樹洞内空間が必要な条件かもしれない。今回繁殖を記録した巣箱間の距離は直線距離でわずかに40 mときわめて接近していたが、このことは本種の繁殖習性を考えるうえで興味深い。観察期間中巣箱内には常に食物のネズミが置かれており食物条件の良さが推測できた

オオコノハズクに巣箱を利用させることは、本種の保護をはかる上でも、また不明な点が多い本種の繁殖習性など詳細な生態研究にも寄与できるものと考えられる。

謝 辞

原田量介、加藤昇氏には標識用足環の取り付け、写真撮影などについてご協力いただいた。また三宅貞敏氏には植物に関してご教示いただいた。紙上を借りてお礼申し上げる。

引用文献

- 清棲幸保. 1978. 増補改訂版日本鳥類大図鑑. 講談社, 東京.
 小池重人・樋口広芳. 1989. 人工営巣場所の種類と架設効果. *Strix* 8: 1-34.
 高野伸二. 1981. カラー写真による日本産鳥類図鑑. 東海大学出版会, 東京.

A breeding record of Collared Scops Owl in a nest box

Shigeki Kobayashi¹, Osamu Fukamachi² & Kimiko Fujii³

1. 948-24 Kuriya-sakata, Tokuyama-shi, Yamaguchi 745-0802
2. 2705-10 Tonda. Shin-nanyou-shi, Yamaguchi 746-0034
3. 2-20-36 furu-izumi, Shin-nanyou-shi, Yamaguchi 746-0024

Two pairs of the Collared Scops Owl *Otus bakkamoena* nested in nest boxes attached on the Japanese Cedar *Cryptomeria japonica* at Niho-Dani in Kano-cho, Yamaguchi Prefecture in 1998. Ten young fledged from two nest boxes in June. This is the first record of nest boxes use by the Collared Scops Owl in Japan. This is also the first record of breeding for this species in Yamaguchi Prefecture.

Key words: breeding record, Collared Scops Owl, nest box, Yamaguchi Prefecture